

第37回 日本受精着床学会総会・学術講演会

0-142

東京, 2019. 08. 01-02

プライベートクリニックにおける単一遺伝子疾患の着床前診断の取り組み

中岡義晴<sup>1</sup>、庵前美智子<sup>1</sup>、中野達也<sup>1</sup>、松本由香<sup>1</sup>、松岡麻理<sup>1</sup>、北山利江<sup>1</sup>、太田志代<sup>1</sup>、  
山内博子<sup>1</sup>、勝佳奈子<sup>1</sup>、門上大祐<sup>1</sup>、森本義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVFなんばクリニック <sup>2</sup>HORACグランフロント大阪クリニック

### 【目的】

単一遺伝子疾患の着床前診断 (PGT-M) は、解析を自施設で行う大学病院だけでなく、外部委託に頼るプライベートクリニックにおいても日本産科婦人科学会の承認が得られるようになった。遠方での治療が困難なために妊娠を諦めていた夫婦にもPGT-Mの選択肢を提供できるように、各地域で実施施設が必要と考えられる。今回、関西で初めてPGT-Mを実施することができた当院での臨床実績を報告する。

### 【方法】

2014年8月より2019年3月までの間に、PGT-Mを希望して当院を受診した32症例の中で、申請希望の無かった10例を除く22例のうち、10例が承認を受け、12例が申請または準備中である。現在まで8症例 (平均年齢36.4歳) 15周期にPGT-Mを実施した。疾患はデュシェンネ型筋ジストロフィー (DMD) が2例、筋強直性ジストロフィー (DM1) が3例、副腎白質ジストロフィー (ALD) が2例、ペルオキシソーム病が1例であった。2例のDM1は他院から胚盤胞を移送された。当院では調節卵巣刺激法により採卵し、顕微授精を実施した後に、胚盤胞生検を実施した。遺伝子解析は藤田医科大学において直接法と間接法を用いて行われた。

### 【成績】

生検胚数41個のうち解析不能胚が5個 (12.2%) あり、36個の解析可能胚のうち非罹患胚が23個 (63.9%) であった。非罹患胚の割合は、常染色体優性遺伝病であるDM1が37.5% (3/8)、X連鎖劣性遺伝病であるDMDとALDが68.0% (17/25) であった。7例の胚移植はすべて単一胚移植であり、5例妊娠 (71.4%)、流産2例 (40%) であった。凍結胚移送のDM1は、2例とも妊娠に至らなかった。

### 【結論】

PGT-Mの移植当たりの妊娠率においては、良好な成績を得ることができた。ただ、DM1は疾患特性か、または2回の凍結融解を必要とした移送胚だったためか妊娠には至らなかった。比較的高い流産率を減らす観点から、同一検体を用いて実施できる PGT-A の併用も考慮すべきと考えられた。